View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kurume University Institutional Repository

自己愛に関する研究 ： 新たな質問紙の作成

著者	天満 翔，日高 三喜夫
雑誌名	久留米大学心理学研究
巻	11
ページ	128-134
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/11316/431

Kurume University
Psychological Research 2012, No. 11, 128-134

原著

自己愛に関する研究―新たな質問紙の作成

天　満　　翔
日　高　三喜夫

本研究の目的は，青年期を主な対象とした自己愛人格傾向の新たな質問紙を作成することであった。本研究における全調査被験者は，287 名であり，すべて大学生であった。調査 1 では，Sperry（1995）を参考に質問紙を作成し，因子分析を行った。当初の想定とはやや異なるものの，因子分析により選択された 30 項目が 3 つの下位尺度（因子名はそれぞれ「認知」，「感情」，「対人／行動」）に分類され，これらの全体が新自己愛性人格尺度（New Narcissistic Personality Inventory）と命名された。新自己愛性人格傾向尺度で測定される自己愛傾向は，小西ら（2006）の自己愛人格傾向尺度（Narcissistic Personality Inventory-35）と正の相関を示した。このことから，本質問紙はほぼ満足いく妥当性が得られたと考えられた。また，調査 2 では，再検査信頼性を検討した結果，同様に本質問紙は十分な信頼性が得られたと考えられた。

キーワード：新自己愛人格傾向尺度，自己愛人格傾向，青年期

問 題 ・ 目 的

現代は，自己愛の時代と言われている。不登校や引きこもり，キレる若者への対応にも，自己愛の傷つきと自己愛憤怒の視点が必要であるとされている（Wolf，1988；2001）。

近年，マスコミで報道されている犯罪には，その動機も不可解なものが多く，その理解と解釈は，専門家の間でも分かれていることも多い。また，学校領域でしばしば聞かれるモンスターペアレントや病院領域におけるモンスターペイシェントなど，その主張の多くが利己的で自己中心的なものが多い。

これらの不可解な動機や，利己的で自己中心的な性格は，DSM における自己愛性人格障害の診断項目に該当するものも多く，我々の生活にも密接に関連している。その中で，自己愛という概念に焦点を当て，それについての今までの研究を踏襲しつつ，かつ，新たに見識を深め，検討する必要があると考えている。

現在まで，多くの臨床家や理論家達によって様々な自己愛に関する記述がなされているが，自己愛の最も基本的な意味は，「自分が自分を愛すること（小此木，1981）」である。小此木は，その理由として，人は，他人から認められたい評価されたい，あるいは価値ある人だと思われたいという願望の自己愛を持っており，これが満たされることが自我へのエネルギー源となり，満足した自己像を保つことができるというのであるからとしている。

しかしながら，その自己愛という言葉には否定的な意味合いが強いにもかかわらず，どこからが正常でどこから病理的かという線引きが曖昧である。Gabbard（1994；1997）は，その著書の中で，同じ行為であるにも関わらずライフサイクルのどの段階にあるのかで，自己愛が異なって判断されることについて記述している。Gabbard は，その違いとして，他の人の気持ちに対する共感と配慮，他の人の考えに対する真の関心，投げ出すことなく長期に渡る関係における両価性に耐える能力，対人関係における対立に自分自身もその一因となっていることを認める能力といった，「個人の関係性の質」を挙げている。

また，小塩（1998），葛西（1999），小西ら（2006）

天満　翔　久留米大学大学院心理学研究科
日高三喜夫　久留米大学文学部心理学科

をはじめ，自己愛に関する多くの研究では，文化差が報告されている。例えば，葛西（1999）は，一般大学生に対し Lapan & Patton（1986）による自己愛尺度の邦訳版を実施し，日本人における因子構造を検討している。その結果，因子分析で Lapan & Patton と同様の 2 因子構造を確認するとともに，「自己誇大感」に関する側面で欧米とは異なる日本的な自己誇大感の満たし方が見られる可能性が示唆されたことで，新たな尺度作成に取り組んでいる。このように，自己愛という概念は基本的には「自分が自分を愛すること」であるが，世代によって，文化によって影響を受けるものである。正常か，あるいは，病理的かということを捉える鍵は，それが過剰かどうか，また，個人の関係性の質やその文化に則したものであることが言えるのである。

また，Kernberg（1975；1993）は，自己愛性人格障害の特徴として，これらの患者においては自己評価の障害が主なる問題で，それは対象関係の特殊な障害と結びついているようであるとし，境界例人格構造の亜変型とした。しかし，Kohut（1971，1977；1994，1995）は境界例水準とは考えず，その障害は精神病理学的連続上での神経症の極に近いものと位置づけた。さらに，Kohut は，特徴として，「特殊な症状の複合体」とし，自己愛患者の熱中や熱意の欠如，ひねくれた活動性，主観的で無感動の感情を挙げた。両者の意見に差異はあるものの，現在では，共通した臨床像として甚だしく自意識過剰で自己に没頭する，常に傷つきやすさを感じている，誇大な自尊心をくじかれないように防衛する，そして，枯渇感，空虚感，非実在感を伴う特殊な抑うつを体験する人として一応のまとまりを得ている。

また，Raskin & Hall（1981）は DSM に記載されている極端な自己愛性人格障害ほど行動特徴ではなく，病理的な行動傾向を持たない自己愛人格傾向を持つ者が正常者の中に認められるとした。Sperry（1995）は，同様に自己愛性人格障害まではないが，その傾向を持つ者として，自己愛人格傾向の存在を記述している。その特徴を表 1 に示す。

わが国でも，小塩（1999）は，高校生において自己愛傾向を持つ者が増加傾向にあるとし，自己愛性人格障害とまではいかないにしろ，Raskin & Hall の概念と同様に，その傾向を持つ者を示している。さらに，Sperry（1995）は一般的な人口におけるこの障害の有病率は 1％にも満たないとし，臨床群では，2～16％の範囲であるとしている。しかしながら，自己愛的な特徴を習慣化している個人を含めるとその数は大変多いものとなるとした。また，小西ら（2006）は自己愛人格傾向の延長線上に自己愛性人格障害を仮定し，それを想定した質問紙を作成している。

これらから，自己愛傾向や自己愛人格傾向の延長線上に自己愛性人格障害が存在すること，また，自己愛性人格障害とまではいかないが自己愛人格傾向を持つ者は，社会に多数存在していること，そして，近年それは増加傾向にあるということが分かる。このように捉えると，少なくとも本研究で扱おうとしている自己愛は，Kernberg が述べたような境界例の亜種として自己愛性人格障害を捉えるよりも，Kohut が述べたような基本的に精神が構成されたものとして，精神病理

表 1　自己愛人格傾向と自己愛人格障害の比較

自己愛人格傾向	自己愛性人格障害
・他者のネガティブな行動や判断に感情的に傷つきやすいが，スタイルや寛容さを持ってこれをのり越えられる。	・憤怒，ストレス，あるいは屈辱の感情を持って批判的に反応する。
・他者の扱いが上手く，自分の目標のため他者の利点や強みを利用する。	・対人関係において搾取的に，会話を有利に進め，自身で終わらせる。
・精力的に自身，考え，企画を売り込むことが出来る。	・自己−重要の誇大的感覚。
・トップに着くことを愛する競争者となり，またそれを愛する。	・問題は特別なものであり，特定の人のみ理解する。
・その領域において自身が最も，あるいは一番達成されていると見ている。	・成功，権力，栄光，美，あるいは理想的愛の限りないファンタジーによって占拠されている。
・自分自身，その能力，特異さを信じるが，特定の扱いや特権を要求しない。	・特定の好ましい扱いの理由無き期待や権利の感覚をもつ。
・達成，昇給，賞賛を達成しようと試み，自己財産をもつ。	・注意や賞賛に対する永続的な必要。
・自身や他者の思考や感情に敏感なほど気づく。	・共感性の欠如，他者がどのように感じているのか認識したり経験したりすることが出来ない。
・いつでも他者によくあつかってもらいたいと期待する。	・羨望の感情の支配。

学上の神経症の末端に近いものとしての自己愛性人格障害が適しているように思われる。

わが国の自己愛研究における質問紙法は，かつて自己愛性人格目録（以下，NPI）が使用されてきた。これは，佐方（1986）によって作成されたもので，「優越性・指導性・対人影響力」，「自己顕示・自己耽溺」「自己有能性・自信」の3因子を抽出し，因子分析結果を報告しているが，研究者によってそれらが異なっているという現状がある。

そこで，近年では，小塩（1998）の自己愛性人格目録短縮版（以下，NPI-S）が用いられることが多い。これは上記のNPIを参考にしながら，質問文の表現や項目を検討し，「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」の3因子を抽出している。しかしながら，NPI-Sは比較的少ない項目で測定できるという利点があるが，そこには自己愛の概念に含まれる自己の身体的な外見に没頭する様や，自分の行動や考えに自信を持ち，確信的に捉えている様といった人格傾向を捉える上で重要な側面が測定されていない。

さらに，小西ら（2006）は，自己愛人格傾向の延長線上として自己愛性人格障害を仮定し，それらの概念を含む自己愛人格傾向尺度（以下，NPI-35）を作成した。その中で，「注目欲求」，「誇大感」，「主導性」，「身体賞賛」，「自己確信」の5因子を抽出し，NPI-S（小塩，1998），Edwards Personal preference Schedule（Edwards，1954）の顕示尺度，賞賛獲得欲求尺度（菅原，1986），自尊感情尺度（山本ら，1982）との関連を検討している。それぞれの各因子との相関関係はある程度認められたものの「身体賞賛」に関しては，NPI-35に特徴的な尺度と考えられ，これらの尺度の必要性には，今後さらなる検討が必要であるとしている。

しかし，NPI-35は，その誇大性や賞賛欲求は測定されるものの，自己愛性人格障害の特徴である，対人関係で相手を不当に利用する，共感の欠如，といった自己愛性人格障害の対人関係における特徴が十分に測定しきれていない面もある。

これらの項は，従来文化差により，日本人には生じにくいものとされてきたところがあるが，近年の研究や日本人の生活スタイルの欧米化を考えると，むしろ，現在の自己愛を捉える上で，重要な項になるではないかと考える。また，いずれの質問紙も認知面に偏りが見られ，多角的な方向から捉えた質問紙とは言い難い。

上記のNPIを含め，これまで多くの質問紙はRaskin & Terry（1988）を基にして作られていた。しかし，Sperry（1995）は，自己愛人格傾向の特徴を「行動スタイル」，「対人関係スタイル」，「認知/思考スタイル」，「感情スタイル」の4つの視点から新たに説明している。これは従来の視点とは異なり，概念的なものではなくより臨床的な観点からその臨床像を記しており，実用的かつ有用なものと思われる。

そこで，まず，今回は小西ら（2006）と同様に自己愛人格傾向の延長線上として自己愛性人格障害を仮定し，新たにSperry（1995）を基に質問紙を作成し，その信頼性，妥当性を検討することを目的とした。

方　　法

調査1．因子分析と妥当性の検討

被験者：私立大学大学院生，及び大学生198名（男性61名，女性137名）を対象に，講義時間の一部を利用して一斉に行い，その時間内に回収した。平均年齢は男性，21.1歳（$SD=5.5$），女性20.2歳（$SD=4.1$）であった。

期間：平成20年6月中旬から7月上旬。

内容：準備として，Sperry（1995）を基に質問項目を48項目作成し，因子分析を行った。そして，小西ら（2006）によって作成されたNPI-35と合わせて，「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（6点）」までの6件法で回答を求めた。

調査2．信頼性の検討

被験者：大学生を対象として2回の調査において全てのデータが揃った被験者を分析対象とした。有効回答者は89名（男性22名，女性67名）で，平均年齢は男性20.7歳（$SD=2.2$），女性20.5歳（$SD=4.5$）であった。実施方法は調査1と同様に行った。

期間：平成20年9月下旬から10月中旬。

内容：調査1で得られた結果から作成した質問紙の信頼性を検討することを目的とし，約1ヵ月間空けたPre-Postで再検査信頼性を求めた。なお，回答方法は調査1と同様である。

結　　果

調査1．因子分析と妥当性の検討

全48項目の合計点について，t検定を用いて性差の検討を行った結果，男女間に有意差は認められなかった（$t(196)=0.03$，n.s）。したがって，男女込みで全48項目に対して因子分析（最尤解・Promax回転）を行った。そこで，因子負荷量が0.35未満で，2つ以上の因子に高い因子負荷量を持つものをその都度削除しながら因子分析を行った結果，最終的に18項目を削

除し，30 項目 3 因子構造を得た。その結果を表 2 に示す。

第 1 因子は，10 項目からなり，「私は将来，偉大な人になるだろう」「私はすばらしい才能を持っている」といった誇大感を中心とした認知を強く表すものとして「認知」因子と命名した。

第 2 因子は，11 項目からなり，「自分を理解してもらえないと悲しくなる」「褒められたいと思う」「賞賛されたり，承認されたりしないと，不安になる」など，自身の感情を強く表すものとして「感情」因子と命名した。

第 3 因子は，9 項目からなり，「はっきり言って他人を見下している」「人からよく無責任と言われる」「自分の目標の達成のためには人を利用する」といった，対人関係やその行動を表すものとして「対人／行動」因子と命名した。

また，下位尺度の α 係数が 0.76～0.85 であることからも，ほぼ十分な内的整合性が認められたと言える。なお，新たに作成した質問紙を新自己愛人格傾向尺度と命名し，その総得点は総体的概念を示すものとして，下位尺度はそれを構成するものとして捉えた。

また，同様の被験者にて，妥当性の検討を行うため，

表 2　新自己愛人格傾向の因子分析結果（Promax 回転後）

No.	項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
X31	私は将来，偉大な人になるだろう	0.84	−0.13	−0.02	0.73
X27	私はすばらしい才能を持っている	0.77	−0.08	0.14	0.62
X39	自分は特別な存在である	0.77	0.08	−0.05	0.60
X47	みんな自分を頼りにしている	0.72	0.04	−0.04	0.52
X35	生まれつき，リーダーになる素質をもっている	0.72	0.06	0.09	0.52
X44	大抵のことは自分で何とか出来ると思う	0.62	0.00	−0.14	0.40
X43	自分の容姿に自信がある	0.60	−0.03	0.15	0.38
X45	何事にもあえて挑戦している	0.60	0.08	−0.17	0.39
X9	精力的に良い考え，企画，あるいは自分自身を売り込む	0.51	0.22	0.01	0.31
X40	自分の行動は自分が一番理解していると思う	0.44	0.00	−0.24	0.25
X36	自分を理解してもらえないと悲しくなる	0.03	0.73	−0.11	0.54
X48	褒められたいと思う	0.22	0.67	−0.13	0.51
X6	他者が褒められたり賞賛されたりすると羨ましい	0.03	0.66	−0.03	0.43
X4	賞賛されたり，承認されたりしないと，不安になる	0.01	0.66	−0.07	0.44
X10	よく他人に嫉妬する	−0.07	0.61	0.14	0.40
X20	傷つきやすい	−0.16	0.60	−0.13	0.40
X14	周りの人からチヤホヤされたいと期待する	0.20	0.59	0.17	0.41
X17	褒められるように行動している	0.15	0.52	0.08	0.30
X24	感情の起伏が激しい	−0.15	0.52	0.25	0.35
X28	欲しいものは手に入れたいと思う	0.15	0.44	0.10	0.23
X16	怒りっぽい	−0.17	0.42	0.32	0.31
X22	はっきり言って他人を見下している	0.12	0.18	0.60	0.41
X30	人からよく無責任と言われる	−0.15	−0.06	0.59	0.38
X18	自分の目標の達成のためには人を利用する	0.04	−0.08	0.59	0.36
X12	冷たい人間だと言われる	−0.13	−0.09	0.57	0.35
X46	自分の思い通りに人を使うのは簡単だ	0.39	−0.24	0.53	0.49
X5	目上の者には上手く取り入り，下の者にはいばる	−0.04	0.19	0.47	0.26
X23	話を誇張して考える癖がある	−0.03	0.35	0.45	0.33
X33	我慢することが苦手だ	−0.06	0.27	0.39	0.23
X26	社交的だが中味を伴わない会話をよくする	0.01	0.10	0.38	0.15
	説明分散				12.01
	説明率				40.04
	α 係数	0.76	0.85	0.82	
	因子間相関				
	Ⅰ	1	−	−	
	Ⅱ	0.22	1	−	
	Ⅲ	0.23	0.36	1	

新自己愛人格傾向尺度と NPI-35 との相関を求めた。その結果を表 3 に表す。

新自己愛人格傾向尺度の総得点及び各下位尺度と NPI-35 の総得点及び各下位尺度の間では，ほぼ全て有意な正の相関が認められた。ただ，新自己愛人格傾向尺度の「対人／行動」と NPI-35 の「自己確信」は相反するものであり，正の相関が認められなかった。中でも「認知」に非常に強い相関があり，逆に「感情」「対人/行動」が弱い相関になっていることから仮説が実証されたと言える。

さらに，新自己愛人格傾向尺度の 30 項目と NPI-35 の 35 項目を合わせた計 65 項目を因子分析（最尤解・Promax 回転）を行った。その結果，新自己愛人格傾向尺度の「認知」は NPI-35 の「誇大感」と「主導性」と，新自己愛傾向尺度の「感情」は「注目欲求」とそれぞれ結びつきが強かった。さらに，因子数を絞り込むと，新自己愛性人格傾向尺度の「認知」と NPI-35 の「身体賞賛」とのいくらかの結びつきが確認されたが，それを除く新自己愛傾向尺度のいずれの因子も，NPI-35 の「自己確信」と「身体賞賛」との結びつきは弱かった。これらのことから，図 1 のように新自己愛傾向尺度の「対人／行動」は独自の因子という結果が得られた。

調査 2. 信頼性の検討

新自己愛人格傾向尺度の信頼性を測るために，再検査信頼性を検討した。新自己愛人格傾向尺度の再検査法による信頼性を検討するために，2 度の調査における，測定値の相関係数である再検査信頼性係数を求めた。その結果，総得点及び各因子共に満足いく結果が得られた。その結果を表 4 に示す。

考　　察

本研究では，まず，自己愛人格傾向を「行動スタイル」,「対人関係スタイル」,「認知／思考スタイル」,「感情スタイル」の 4 つの視点から捉えた Sperry（1995）を基に質問項目の作成を試みた。その際，NPI-35 と同様に自己愛人格傾向の延長線上に，自己愛性人格障害が存在することを仮定した。また，近年の研究や日本人の生活スタイルの欧米化を考え，「対人関係」を自己愛を捉える上で概念とし，因子に組み入れることとした。その上で，新たな自己愛傾向尺度を作成し，その妥当性と信頼性を検討することを目的とした。

表 3　新自己愛人格傾向尺度と NPI-35 の相関

	NPI−35						新自己愛人格傾向尺度			
	注目欲求	誇大感	主導性	身体賞賛	自己確信	合計	認知	感情	対人/行動	合計
注目欲求	1									
誇大感	0.67 **	1								
主導性	0.68 **	0.79 **	1							
身体賞賛	0.62 **	0.55 **	0.48 **	1						
自己確信	0.35 **	0.62 **	0.56 **	0.27 **	1					
合計	0.86 **	0.91 **	0.90 **	0.67 **	0.64 **	1				
認知	0.59 **	0.87 **	0.81 **	0.52 **	0.68 **	0.86 **	1			
感情	0.62 **	0.23 **	0.25 **	0.29 **	0.03 ns	0.39 **	0.24 **	1		
対人/行動	0.51 **	0.23 **	0.24 **	0.42 **	−0.03 ns	0.36 **	0.20 **	0.48 **	1	
合計	0.79 **	0.62 **	0.60 **	0.55 **	0.33 **	0.74 **	0.68 **	0.81 **	0.71 **	1

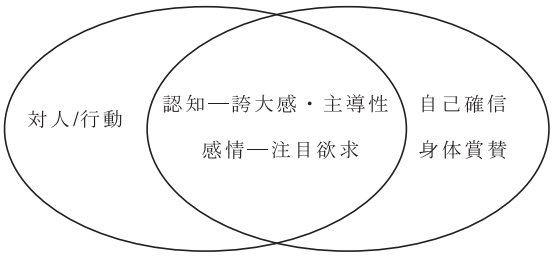

図 1　新自己愛人格傾向尺度と NPI-35 の関係

表 4　新自己愛人格傾向尺度の再検査信頼性係数

再検査信頼性係数(r)	
認知	0.88
感情	0.87
対人/行動	0.84
合計	0.87

調査1では，ほぼ満足いく内的整合性を備えた3因子構造30項目が因子分析によって確認された。その際，当初想定した「行動」因子は，満足いく結果が得られなかったが，項目の検討の結果，問題ないと考え，各下位尺度に組み込むことにした。また，その妥当性を検討した結果，新自己愛人格傾向尺度の総得点及び各下位尺度とNPI-35の総得点及び各下位尺度の間では十分な正の相関関係にあることが確認された。さらに，新自己愛人格傾向尺度とNPI-35の全項目を因子分析した結果，新自己愛人格傾向尺度の「対人／行動」因子は，NPI-35のいずれの下位尺度とも結びつきがない，独自のものであることが証明された。

調査2では，その信頼性を検討した結果，十分に満足できる再検査信頼性が確認された。このことから，新自己愛人格傾向尺度では，状態的なものを測定しているのではなく，むしろ特性的なものを測定していることが分かる。

以上のことから，本研究において作成された新自己愛人格傾向尺度の妥当性と信頼性が確認され，実用可能な尺度として用いることが出来ると言える。しかし，並存的な妥当性が確認されたものの，今回の研究では構成概念妥当性が十分に検討されたとは言いがたい。今後，臨床群との比較を用いて更なる検討が必要であるように思われる。

ただ，これらはあくまでも質問紙法であり，投映法のようなより深層まで探りきれていない面も否めない。例えば，今回は確認することが出来た「対人／行動」因子のように表面化しやすいものは，質問紙法では防衛的になり測定が困難になる可能性も大いに考えられる。これは，多くの質問紙法の研究で述べられた，日本人には適していないからという理由で，あまり表面化して捉えることが難しいという現状を含むものである。

また，近年の研究では，KernbergとKohutが記述した連続体の両端の2つの極を，それぞれ周囲を気にかけない自己愛者（oblivious type：無自覚型），及び，過剰に気にかける（hypervigilant type：過敏型）の2つに分類することがある（Gabbard，1994；1997）。しかしながら，本研究では，上地・宮下（2005）のような過敏型優位とされた日本の近年の研究に疑問符を投げかけるものとなっている。例えば，誇大感を中心とした「認知」因子や，NPI-35における「注目欲求」因子と相関関係にある「感情」因子，今回，新たに抽出した「対人／行動」因子は，表面化しやすいものであり，先の分類に従うのなら，無自覚型に分類される。

しかし，今回作成された新自己愛人格傾向尺度と上地・宮下（2005）の自己愛性脆弱尺度のそれぞれの質問紙の各項目を見ていくと，かなりの類似点が見出せる。にも関わらず，前者は無自覚型を中心とした質問紙となり，後者は過敏型を中心とした質問紙となっている。そこからは，質問紙上では，両者が混在して存在し，明確な差はないと考えられる。

Gabbardによれば，1人の人格が時によって両方の特徴を示す場合があり，何らかの共通した背景要因と，また，相違点を生み出す背景要因が存在していると考えられるとしている。このように，無自覚型と過敏型は別々に存在するのではなく，並存的に存在しており，むしろ，前者は表面的に現れやすく，後者は，表面的に現れにくいのではないかと考えられる。

今回新たな質問紙の作成を試み，満足いく結果が得られた。今回は，自己愛をスペクラム上で捉えたため，今後の課題として，臨床群での検討が1つ上げられる。もう1つは下位分類の検討のため，更なる質問紙の精査と質問紙に限らない新たな方法を見出す必要があるように思われる。

文　　献

American Psychiatric Association (2002). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Forth Edition *Text Revised*: *DSM-Ⅳ-TR*. Washington, D. C. 高橋三郎，大野裕，染矢俊幸（2003）DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引．医学書院，P239.

Edwards, A. L. (1954). Edwards personal preference schedule .New York: The Psychological Corporation.

Gabbard, G. O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-Ⅳ version. Washington, D. C: American Psychiatric Press. 舘哲朗（1997）．精神力動的精神医学―その臨床実践「DSM - 4版」〈3〉臨床編2軸障害　岩崎学術出版社.

上地雄一郎・宮下一博（2005）．コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成　パーソナリティ研究，**14**，80-91.

葛西真記子（1999）．日本版「誇大感（Grandiosity）」欲求尺度作成の試み―Kohutの自己愛論にもとづいて―　カウンセリング研究，**32**，134-144.

Kernberg, O. F. (1975). Borderline conditions and pathological narcissism. New York: Jason Aronson. 松浪克文・福本修（1993）．境界例の力動的精神療法　金剛出版.

Kohut, H (1971). The analysis of the self. New York : International Universities Pless. 水野信義・笠原嘉（1994）．自己の分析　みすず書房.

Kohut, H (1977). The restoration of the self. Madison : International Universities Pless. 本城秀次・笠原嘉（1995）．自己の修復　みすず書房.

Lapan, R. & Patton, M. J. (1986). Self-psychology and adolescent process : Measures of pseudoautonomy and peer-group dependence. Journal of Counseling Psychology, **33**, 136–142.

小西瑞穂，大川匡子，橋本宰（2006）．自己愛人格傾向尺度（NPI-35）の作成の試み　パーソナリティ研究，**14**，214–226.

小塩真司（1997）．自己愛傾向に関する基礎的研究―自尊感情，社会的望ましさとの関連　名古屋大学教育学部紀要（心理学），**44**，155–163.

小塩真司（1998）．自己愛傾向に関する一研究―性役割観との関連　名古屋大学教育学部紀要（心理学），**45**，45–53.

小塩真司（2001）．自己愛傾向が自己像の不安定性，自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響　性格心理学研究，**10**，35–44.

小塩真司（2004）．自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版.

小此木啓吾（1981）．自己愛人間　朝日出版社.

Raskin. R. & Terry. H. (1988). A principal components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890–902.

佐方哲彦（1986）．自己愛人格の心理測定―自己愛人格目録（NPI）の開発　和歌山県立医科大学進学過程紀要，**16**，77–86.

菅原健介（1986）．賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求―公的自意識の強い人に見られる２つの欲求について　心理学研究，**57**，134–140.

Sperry, L (1995). Handbook of Diagnosis and Treatment of the DSM-IV Personality Disorders. Brunner-Routledge,P113–P134.

Wolf, E. S (1988). Treating the Self : Elements of Clinical Self Psychology. Guilford Pr. 安村直己・角田豊（2001）．自己心理学入門　コフート理論の実践　金剛出版.

山本眞理子，松井豊，山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64–68.

Research for self-love―to develop a new scale

Sho Tenma (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)
Mikio Hidaka (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

The purpose of this study was to develop a new scale for measuring a narcissistic tendency, mainly in adolescence. Two hundred eighty-seven(287) university students participated in the study. In Study 1, we referred to Sperry (1995), developed an inventory and took a factor analysis. As a result, the 30 items selected through the factor analysis were grouped into three subscales (cognitive, feeling, interpersonal/behavior), the whole of which was named New Narcissistic Personality Inventory. A narcissistic tendency as measured by the New Narcissistic Personality Inventory was found to be positively correlated with the Narcissistic Personality Inventory-35 (Konishi et al, 2006). The inventory provided good validity. In addition, in Study 2, the inventory provided sufficient reexamination reliability.

Key words : New Narcissistic Personality Inventory, narcissistic tendency, adolescence